

(社) 東洋音楽学会西日本支部 支部だより

Newsletter of the West Japan Chapter, Society for Research in Asiatic Music

第 67 号 (2010 年 6 月 20 日)

◆ 定例研究会のご案内 ◆

● 第 248 回定例研究会

日 時 : 2010 年 7 月 10 日 (土) 午後 2 時～5 時  
場 所 : 京都市立芸術大学 L2 (もしくはL1) 教室  
例会担当 : 龍村あや子

1. 研究発表 仲万美子 (同志社女子大学)  
「旧満州で知りえた音楽・芸能情報 — 日本語活字メディアを事例に」
2. 特別セッション: 沖縄と東アジアの戦中・戦後の社会とメディアをめぐって
  - (1) 修士論文発表  
照屋 夏樹 (京都市立芸術大学)  
「アメリカ占領下の沖縄における『民謡』と社会活動: 1945-1972」
  - (2) 招待発表  
小林 聡明 (東京大学/ソウル大学、朝鮮半島地域研究・メディア史)  
「『電波戦争』の発進基地としての沖縄 — 米国による心理戦とプロパガンダ・ラジオ」
  - (3) コメントと全体討論  
・コメンテーター 久万田 晋 (沖縄県立芸術大学 附属研究所伝統芸能部門)

● 第 249 回定例研究会

日 時 : 2010 年 7 月 31 日 (土) 午後 1 時から 4 時 30 分  
場 所 : 国立民族学博物館 第 6 セミナー室

1. 修士論文発表
  - (1) 「大阪府下における「ふとん太鼓」の分布と特徴」  
柏 祐香子 (大阪芸術大学)
  - (2) 「囃し田の「芸能化」 — 伝統習俗から演じられる「芸能」へ」  
松井 今日子 (神戸大学)
2. 研究発表  
「常磐津節の五十音図にみる音声表現の特徴 — 能・浄瑠璃の五十音図と比較して」  
龍城 千与枝 (京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター共同研究員)
3. 展示見学  
「国立民族学博物館の新音楽展示」 福岡 正太 (国立民族学博物館)

◆ 定例研究会の記録 ◆

● 第 245 回 定例研究会

とき：2010 年 1 月 30 日(土) 14:00～

ところ：京都教育大学サテライト教室 (キャンパスプラザ京都 6 階 第 6 講習室)

テーマ：「絵解きと音楽をめぐって」

司会・進行 今田健太郎

例会担当委員：田中多佳子

発表要旨

奈倉洋子 (非会員・京都教育大学名誉教授)

ドイツの民衆文化「ベンケルザング」——街角の絵解き師のうたと語りと掛図の世界——

ベンケルザング(Bänkelsang)とは、教会の前、歳市の市、各種の祭などで、ベンケルゼンガーと呼ばれる歌い手達が、台(Bänkel)の上にのぼって、大きな掛図の絵の 1 コマ 1 コマを棒で指し示しながら、語りと歌(Sang)から成る話を、手回しオルガンなどの伴奏にのせて、ジェスチュアたっぷりに聴衆に語りかけ、歌いかける催しである。一人の場合もあったが、多くの場合、夫婦や家族で行っていた。ベンケルゼンガーの先駆は、中世の遍歴芸人、15~17 世紀の新聞売りなどとされている。ベンケルザングの成立時期は、はっきりとは確定できないが、ベンケルザングの催しが描かれた絵の人々の服装から推測して、遅くとも 17 世紀には成立していたと思われる。18 世紀頃までは宗教的なテーマを扱ったものが多かったが、徐々に世俗的なテーマのものが増えていき、19 世紀の半ばには、世俗的テーマの方が数の上で多くなっていく。20 世紀になると、映画という大衆娯楽の出現により、ベンケルザングは徐々に衰退していくが、1930 年代までは街中で見る事ができた。

次に、ベンケルザングを構成する三つの要素について、各々の特徴を述べていく。

(1) 掛図(Schild)：掛図は、聴衆を引きつける上で非常に大きな役割を果たした。掛図の大きさは 17~18 世紀にはさまざまだったが、19 世紀には、縦 3m、横 2m ほどにもなった。掛図の画面は、5~8 コマに区切られていることが多く、話のクライマックスや結末部などが画面中央に大きく描かれ、その他は、話の展開の順を追って描かれているものも多い。こうした画面区分や配列方式は、アイコン、教会のフレスコ画などの宗教芸術から引き継いだものと考えられる。掛図の絵は単純な線と素朴な画法で描かれ、登場人物の感情が、顔の表情や、驚き、悲哀、懇願の身振りなどにより、かなり誇張して描かれている。ベンケルゼンガーの思い入れたっぷりなうたと語りの身振り、掛図の絵の中の驚きや悲哀の身振りなどが相俟って、聴衆の心を大きく揺り動かした。

(2) 語りとうた：ベンケルゼンガーの語りは聴衆への語りかけではじまり(Leute hört ! ,Ihrhört ! 「みなさん、お聞きください」など)、事件を悲しみ嘆く声で、あるいは興奮して激したドラマティックな調子で語る、一種のシュプレヒゲザングだった。語りの後にはうたが歌われた。うたのメロディーは単純な構造のもので、2 行、2 行で繰り返すメロディーが多い。独自のメロディーは殆どなく、讃美歌、民謡など、よく知られたメロディーを転用することが多かった。聴衆は、購入したパンフレットに載っている歌詞を、後に自分で歌おうとしたので、メロディーは、よく知られた、簡単に歌えるものの方がよかったのである。うたの伴奏には、18 世紀はヴァイオリンやハープ、19 世紀は手回しオルガンが使われることが多かった。

(3) ビラ、パンフレット：ベンケルゼンガーは、その語る話とうたの歌詞が載ったビラやパンフレットを売ることによって生計を立てていた。話のテーマは、奇蹟、聖者伝説などの宗教的なもの、世俗的なものでは男女の愛、母性愛、殺人事件(モリタートと呼ばれる)、洪水や地震などの自然災害、船の遭難、炭鉱事故、政治的事件などだった。

### 水野善文 (非会員・東京外国語大学教授)

#### 絵解き『刈萱上人と石堂丸』について——信州・往生寺に伝わる例——

本報告の趣旨は、現在も継承されている絵解きの一例を映像・音声資料を用いて紹介することにあつた。

○報告事例：安楽山菩提心院刈萱堂往生寺(浄土宗・長野市往生地、善光寺の北西約 1 km、開山：健保 2 (西暦 1214) 年<鎌倉期>、刈萱寂照坊等阿法師かるかやじやくしやうぼうとうあ ほうし(加藤左衛門尉重氏かとうさゑもんのかとうしげ)による)に伝わる絵解き。現住職(81 歳)および寺庭(77 歳)が、「刈萱親子御絵伝」(二副の掛け軸、各縦 138.5×横 71.0cm、江戸後期ころの作、明治 18 年修復、右 6 段、左 5 段の計 11 図、約 20 場面からなる)を楚で指し示しつつ、参詣客(拝観料を徴収)に披露している。所要時間約 10~15 分。

○絵解きの内容は同寺の開山・刈萱上人の一代記となっている。

<要約>九州・博多の城主であつた重氏は、花見の席で偶然にも杯に舞い落ちた桜の蕾に無常を感じ、身重の妻・桂御前をのこして出家する。比叡山・叡空のもとで得度、名を寂照坊等阿と称す。のち、法然のもとで念仏の修行に専念して 10 数年経る。国許に残してきた妻子が尋ねてきては修行の妨げになると、高野山へ。14 歳に成長した息子・石堂丸が母とともに父の消息を尋ねて高野山にいたるも、女人禁制ゆえ石堂丸だけが入山、父・刈萱と出会う。父は一目見てわが子と察しながらも自分が父親だとは名乗らず、お訊ねの方は逝去してしまつたと偽る。石堂丸が泣く泣く麓にもどると、旅の疲れで母が他界したあとであつた。母を茶毘にふし出家する決意をして、再び高野山にのぼり、

実の父親のもと、そうとは知らず、弟子（道念）となって修道生活を共にする。全てを  
了解している父は私心という邪念を払うべく、最後の修行地を求めて善光寺に至る。善  
光寺如来のお告げに従い、現往生寺の地に招かれ庵を結び、地藏菩薩を一体刻んで 83  
歳にして往生する。のち石堂丸も善光寺如来のお導きにて当地に至り、父の彫った地藏  
菩薩を手本に、もう一体刻んで残す。（それが、親子地藏と呼ばれて信仰を集めている。）

#### ○歴史

この絵解きの起源は、高野聖による唱導文学である説経節『せつきやう かるかや』  
に由来するという。室町末期と思しき絵入りの古い写本の存在が知られるほか、最古の  
刊本として寛永 8（1631）年、しやうりや喜衛門版があるという。三野（2009）によ  
ると、これとさらにこれから展開した浄瑠璃、並木宗輔・丈輔合作『<sup>かるかやどうしんつくしの</sup>苺萱桑門筑紫いえ  
づと』（享保 20（1735）年初演＜翌年、歌舞伎（大坂・中山座）にも＞、江戸時代、読  
本、草双紙と変容して流行）および<sup>かんげほん</sup>勸化本<sup>しゅんちやうし</sup>春帳子作『刈萱道心行状記』（5 巻 5 冊、寛  
延 2（1749）年江戸書肆辻村五兵衛作、民衆に向けた談義説法の種本。仏典からの引用多  
く、娯楽性高い）の、主に三つの系統に分類でき、同じ長野市にある石堂丸終焉の寺、  
刈萱山西光寺に伝承される絵解き縁起は浄瑠璃系であるのに対し、往生寺の伝承は勸化  
本の系統を継いでいるという。

#### ○絵解きのヴァージョン

この報告では、往生寺で現在の住職が唱えるもの（ビデオ）、先代住職夫人が唱える  
もの（音声）のそれぞれ全体と、住職が聞き覚えている戦前の文語調のもの（音声）の  
一部を紹介した。先代住職夫人のものが、旋律があって非常に音楽的しかも内容も聞き  
取りやすいのに対し、現代のものは一本調子で音楽的でないという違いがある。文言は  
ほぼ同内容であるが、唱え方は演者の自由裁量に委ねられて伝承されてきたものと思わ  
れる。

#### <参考文献>

荒木繁・山本吉左右 編注 1973『説経節』（東洋文庫 243）、平凡社。

三野 恵 2006「刈萱道心」『大法輪』第 73 巻第 6 号、大法輪閣、190-195 頁。

三野 恵 2009『刈萱道心と石童丸のゆくえ—古典世界から現代へ—』（新典社選書 26）、  
新典社。

林 雅彦 編著 1993『絵解き万華鏡—聖と俗のイメージネーション』、三一書房。

久野俊彦 2009『絵解きと縁起のフォークロア』、森話社。

## 報告

本定例研究会は「絵解きと音楽をめぐって」というテーマで、まず今田健太郎氏が問題提起を行なった後、奈倉洋子氏と水野善文氏の二つの講演が行なわれた。

今田氏は、絵解きという行為を「絵のなかに封じ込められた物語をほどいてきかせる役まわり」と定義し、絵解きを映画のイメージに重ね合わせた上で、気象予報士や競馬中継など、伝統的な芸能に限らない現代的な職分にも敷衍して述べた。絵の内容を聞き手に無理なく理解してもらうためには、聞き手の反応を見ながら語りや演出を変えていく必要がある。そして音楽もその一助となることもあるが、ただし必然的なものではない。すなわち、絵解きは音楽研究の中心にはならないのではないか、という疑問を投げかける。そして、絵解きのなかの音楽というよりも、演者が実際に絵解きのパフォーマンスを行なう際の絵や音楽の役割に注目することが重要であり、音楽と絵解きは必然的に結びつくことはないが、フォーマットもしくはパッケージとしてとらえることはできると結んだ。

この後、一つ目の奈倉洋子氏による講演は、ドイツのベンケルザングBänkelsangという絵解きについてである。木枠に張りのべた掛図を使い、うたと語りで絵解きを行なうベンケルザングは17世紀ごろに成立し、19世紀に最盛期を迎えるが、映画に押されて衰退し、1960年ごろまでわずかに命脈を保った。絵解きに取り上げられる物語は宗教的な内容から徐々に世俗的なテーマに移行し、受容層は主として都市や農村の下層民衆である。上演は聴衆への語りかけで始まり、その後に伴奏楽器（ヴァイオリン、ハープ、手回しオルガンなど）にのってうたが歌われるが、歌のメロディは当時よく知られていた歌謡を転用したケースが多かったようである。講演には図像資料が多用され、また映画の一場面ではあるが、実演も見ることができた。

二つ目の水野善文氏による講演は、水野氏の実家である安楽山菩提心院刈萱堂往生寺（長野市）に伝わる絵解きについての報告である。刈萱上人と石堂丸にまつわる物語を描いた掛け軸2幅を用い、代々住職によって伝承されてきた。物語の起源は室町期に遡るが、絵解きは江戸後期に始まったと考えられる。現在は水野氏の父である住職が絵解き伝承者として随時参拝者に聞かせている。現住職の実演を映像で見た後、水野氏の祖母と戦前の語りを音源で聞いたが、三者三様に語り方がかなり異なる。ひとつの寺に伝わるひとつの芸能ではあるが、語り口調にこれほど個人差が見られるのは興味深い。特に現住職の散文的朗誦風な語りに対して、祖母の旋律豊かな語り口調は非常に印象的であった。このようなアレンジの自由度に関しては、フロアから、次代伝承者と目される水野氏がどのアレンジを伝承するのか、あるいは自己流を貫くのかという質問が出て、関心の高さがうかがえた。

問題提供者の今田氏が述べたように、確かに音楽は絵解きにとって必然のファクターではないが、この二つの絵解きの事例を見て聞いた限りでは、聞き手を描かれた物語の中に引き込んでいくには、単に調子をつけて語るだけではなく、やはり音楽的な要素が重要な機能を果たすと感じられた。

(由比邦子)

### ●第 246 回 定例研究会

とき： 2010 年 2 月 20 日 (土) 14:00~17:00

ところ：京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター合同研究室 1 (新研究棟 7 階)

テーマ：河東節の伝承をたどる

—町田佳聲「三味線声曲における旋律型の研究」の河東節譜を事例として—

ゲスト：山彦千子 (重要無形文化財河東節演奏者、非会員)

お話：吉野雪子 (東日本支部)

構成・司会：山田智恵子 (西日本支部)

日本伝統音楽研究センター共同研究と共催

### 報告

今回の定例会は、京都芸術大学伝統音楽研究センターの共同研究「町田佳聲の三味線音楽研究—三味線音楽の通ジャンルの音楽様式研究に向けて」の研究会と共催で開かれた。

はじめに、研究代表者である山田智恵子氏より、研究会の主旨として、「三味線音楽について、音楽そのものを扱い、その構造や特徴を抽出するための研究」の必要性が説かれ、そのアプローチへの基礎資料として、町田佳聲の『三味線声曲における旋律型の研究』(東洋音楽研究第 47 号第 2 分冊)が紹介された。

研究会では、『三味線声曲における旋律型の研究』に収められた五線譜の譜例を、底本である「日本音楽講座 三味線声曲の旋律型の研究」(東洋音楽学会例会で昭和 30 年 11 月から 31 年 10 月まで町田が行った講座の謄写版テキスト)の譜例と比較検討することにより、町田が通ジャンルの俯瞰して見出そうとした「三味線音楽に共通する旋律型」の概念を捉えなおし、訓練を受けた人が見ると共通するであろう、三味線音楽を記述するためのメソッドを検討することが主な目的とされている。その一環として、河東節の譜例検討が、今回の定例会の主眼となった。

前半は、河東節の文献研究を専門とする吉野雪子氏より、河東節の伝承について、細かな説明がなされた。河東節は、享保 2 (1717) 年に初世十寸見河東が語ったのを起源とし、初めは江戸歌舞伎に出演したが、やがて劇場から離れ、富裕な町人や通人達の間で好まれ、伝承された。説明では、正本類から興行年表をたどり、宝暦年間まで初演の劇場がわかる事をしめされた。同時に、それ以降は、徐々に劇場を離れていくことが認められる。宝暦 9 (1759) 年には、『十寸見要集』が出版されている。これが正本とは異なる点として、収録曲のうち、とくに宝暦から明和初めまでに初演された曲に、フシ付けの文字譜やゴマ点が付与されていることが指摘された。『十寸見要集』は、河東節の公式テキストとして使用されたと考えられ、家元が変わるたびに改訂版が出されている。しかし明治 39 年の改訂では、江戸時代にあったゴマ点などの記号が省かれ、文字譜だけになり、昭和 29 年の『十寸見集』では、文字譜もすべて省かれ、詞章のみになっている。

一方、明治期にはいと、江本瞬平 (吉住小十郎) が採譜した五線譜の記録がのこされている。当時河東節の伝承には、山彦秀次郎が率いる真澄派、山彦栄子が率いる藤岡派の二派があったが、五線譜に採譜する際には、江本は両方に習って楽譜に起こしたとされている。

五線譜に書かれた情報を読むとき、採譜者が、どの演奏者の演奏を記述したものかを確認できればいい。が、町田の譜例には、演奏者の情報はかかれていないものも多い。また、町田の譜例のうち、河東節は 133 例挙げられているが、そのうち 12 例が、現在では演奏されない曲から取り上げられている。ただし、これらの曲はすべて、大正 10 年 4 月に刊行された『十寸見要集』に収録されているということが、吉野氏によって指摘された。

最後に、現行曲の『助六』から、町田の譜例にもある、河東節の代表的な旋律型として、「江戸ガカリ」「三重」「ギンガハリ」「レイゼイガカリ」をとりあげ、ビデオを見ながら紹介した。

後半は、山彦千子氏を招き、『助六由縁江戸桜』の演奏を聴いた。「レイゼイ」、「ギンガハリ」などの旋律型については、外の現行曲と比較しながら、その特徴について、伝承に基づいた検討を行った。また、同じ歌詞でも繁太夫節の『助六』にはないが、河東節の『助六』ではつかわれるという「ナゲブシ」という節廻しも紹介された。

千子氏は、現行曲で文字譜によって伝えられる旋律のさまざまを演じ、聴講者に、町田の譜例にある旋律型を検討する機会を与えた。フロアからは、旋律型に限らず、河東節独特の掛け声や、三味線のハジキなど、河東節らしさに関する言及も含め、さまざまな疑問や演奏のリクエストがむけられた。実技を交えた非常に丁寧な回答により、有意

義な時間を過ごす事ができた。

本研究会は、通ジャンルの音楽様式の研究を目的としている。町田が五線譜に採譜をした時点で、譜例には伝承者とは異なる視点が付与されることもあるであろう。一方で、伝承者として、五線譜という表現手段で書き残したものもあるだろう。それは、町田が抽出する音を選ぶときの基準ではないだろうか。今回の検討によって、河東節の譜例は伝承に比較的忠実であることがわかった。とはいえ、五線譜という記録方法をとることで、一体誰に、何を示すことができるのか、また、譜例として旋律型を抽出する基準はなになのか、など、疑問は残る。今後も、音楽様式につながる検討を重ねることが課題となるだろう。

(龍城千与枝)

### お詫びと訂正

前号の支部だよりにおいて、1月30日および2月20日開催の定例研究会について、それぞれ第246回、第247回とお知らせいたしました。正しくは第245回と第246回でした。お詫びして訂正いたします。

---

### ◆◆◆ 研究発表申し込みについて ◆◆◆

西日本支部定例研究会の研究発表申し込みは、下記までご連絡ください。

〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園 10-1 国立民族学博物館 福岡研究室気付  
電話(06) 6878-8351 ファクシミリ (06) 6878-7503  
E-mail: fukuoka@idc.minpaku.ac.jp

### ◆◆◆ 入会申し込み・住所変更について ◆◆◆

入会ご希望の方は、80円切手を同封し、下記の学会本部事務局へ入会案内・申し込み用紙をご請求ください。入会申し込み用紙は、ホームページからもダウンロードできます。会員の住所変更等についても本部事務局へお知らせください。

社団法人 東洋音楽学会

事務所 〒110-0005 東京都台東区上野 3-6-3 三春ビル 307号室  
電話 (03)3832-5152 ファクシミリ (03) 3832-5152  
学会ホームページ <http://wwwsoc.nii.ac.jp/tog/>

---

### 支部だより 第67号

発行：(社) 東洋音楽学会西日本支部 編集担当：奥中康人、谷正人  
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園 10-1 国立民族学博物館 福岡研究室気付  
電話(06) 6878-8351 ファクシミリ (06) 6878-7503  
E-mail: fukuoka@idc.minpaku.ac.jp